

和歌を自力で読み解く

——「目離れせぬ雪」（『伊勢物語』）の授業をめぐる——

土居 一之

1. 古典・古文の授業観と本実践

高校での三年間の古典・古文の学習到達点を測る一つの指標として、和歌の口語訳（解釈）を学習者自身の力で行うことを目標として掲げた。和歌の口語訳（解釈）に関しては、単独では感動の中心や背景を詳細まで読み取ることが難しいことが多い。また、通常の学習活動においても、和歌の読解（解釈・口語訳）を中心に据えて行うことは少ない。同時に、和歌の解釈・理解を既存の解釈・資料に依存して深く吟味しない場合も、決して少なくないという現状がある。しかし、感動の中心として、登場人物の心象を最も表出した表現として、古典・古文の和歌の読解を、様々な資料を基にしながら深く読解していくことには、大きな意味があると考えている。

本報告は高校三年という学習の段階であり、指導者自身に教材研究時の作品解釈に関する興味深い発見があったこ

と、その課題追求が作品全体の俯瞰に供するものであるとの判断ができたこと等の条件がそろって実践したものである。

2. 授業概要

対象生徒 津山東高校三年 普通科 古典A選択者十五名
 実施期間 平成二十八年六月下旬 三時間
 単元名 和歌を自力で読み解く
 教材 「目離れせぬ雪」「伊勢物語」 教育出版
 目標 和歌に込められた感動の内容を読み取り、口語訳を自力で完成させる。

展開

○第一時 図書館 授業プリント①（本文）の配布。各自音読・指名での音読・範読をおこなう。各自で全文の口語訳を作成する。

○第二時 図書館 学習者が前回作成した和歌の口語訳六つを載せている授業プリント②を配布。

参考資料「小野の雪」を配布。

(1) 「目離れせぬ雪」の歌のどこに親王は痛く感動したのか。

(2) 「小野の雪」の最後の和歌と「目離れせぬ雪」の和歌と、詠み手（在原業平）の思いは違うのか。

(3) 『伊勢物語』の編者は、「小野の雪」と「目離れせぬ雪」の二つの話をなぜ載せたのか。

○第三時

図書館 学習者・授業者ともに再度「目離れせぬ雪」の和歌の口語訳を検討する。最後に山本教授の論文を引用し、授業者の口語訳の提示を行う。感想の記入。

3. 「目離れせぬ雪」の教材研究

(1) 「目離れせぬ雪」の本文

昔、男ありけり。童より仕うまつりける君、御髪下ろし給うてけり。睦月には必ずまうでけり。朝廷の宮仕へしければ、常にはえまうでず。されど、もとの心失はでまうでけるになむありける。

昔仕うまつりし人、俗なる、禪師なる、あまた参り集まりて、睦月なれば、事だつとて、大御酒賜ひけり。雪こぼすがごと降りて、ひねもすにやまず。皆人、酔ひて、「雪に降りこめられたり」といふを題にて、歌ありけり。

思へども身をし分けねば目離れせぬ雪の積もるぞ
わが心なる

と詠めりければ、親王、いといたうあはれがり給うて、御衣脱ぎて賜へりけり。

(2) 「目離れせぬ雪」の和歌の解釈例

思へども 身をし分けねば 目離れせぬ
雪の積もるぞ わが心なる

（傍線部は筆者・以下同じ）

① 指導書の口語訳

お慕いしているけれども、身を分けることができないから、目を離す間もなく降り続けている雪が積もるのが私の心である。

② 『新潮日本古典集成』（新潮社）の口語訳

いつもわが君のことを思っておりますが、公の務めと二つに身を分けることが出来ませんので、今絶え間もなく降り続ける雪が、こんなに積もってここに閉じ込められるのは、むしろ私の望みになつたことなのです。

③ 『新編日本古典文学全集』（小学館）の口語訳

ご主君をお慕いしておりますも、わが身を二つに分けておそばにお仕えすることができませんので、せめて、このように降りしきる雪が積もるのが、帰りたく

ない私の心になうことなのです。

④指導書の説明

「離る」は離れる、足が遠くなる、よそよそしくなるの意。「目離れせぬ」の解釈には、古来さまざまな説がある。近代の主な注釈でも、①雪が絶え間なく降り続けると解するもの。②かたときも目から離れず眼前に降り積もる雪と解するもの。③「目離る」を親しい人に会われないで疎遠になる意の歌語と解し、あなたのそばにいられるようにと解釈するものなどがあげられる。

こは「目を離す間もなく降り続けている雪」ととる。普段は公務のため心ならずも親王の側にお仕えすることができずでしたが、今日絶え間なく降り続く雪のせいでお側にいられるようになったのですから、雪が積もって都に帰ることができなくなるのは、むしろ私の望みになつたことなのです、の意。

なお「目離れせぬ」を掛詞のように解釈して、いつもは公務のため、不本意ながら親王に「目離れ」（ご無沙汰）しているが、雪の積もるおかげで親王に「目離れせぬ」こととなつた。だから体を二つに分けることのできない自分にとっては、雪が積もることは本望なのだとする説（全評釈）もある。「心」は自分の望み、意向の意（教育出版）

(3)「目離れせぬ雪」の解釈（口語訳）についての考察

①根本的な疑問点

前述の解釈（口語訳）では、「雪に降りこめられたり」という題に対する歌としては問題ないが、続く本文の「と詠めりければ、親王、いといたうあはれがり給うて、御衣脱ぎて賜へりけり。」という物語の末尾部分に対応できない。親王は歌の内容に「いといたうあはれがり」と最大限の感動をもって衣を与えるという行為に及んでいるのに、その感動に相当する訳・解釈ではない。

歌物語の特徴は、読まれる歌の背景を詳細に述べることにより、歌自体の内容を明確に読者に伝える意図を持つて書かれている、という大前提をもとに考えたとさらに幾つかの疑問点が浮かんでくる。出家した主君（親王）のもとに正月に集つた人々が、特別なことだとして酒を賜つて酒宴を開いている。主人公である「男」（在原業平）と同様、その人々は日常の立場を越えて、主君（親王）のために集つた人々であつたことが伺われる。その人々が「雪に降り込められた」という状況は、日常に戻る術を（親王のもとを離れることを）失つたことを、ある意味喜んでいるはずである。降りしきる雪により悲しい別れが遠ざかったこと、今暫くはこの酒宴が続いてお互いに顔を見合せている状態が続いていることを、かりそめではあるが喜んでいたはずである。そのような感情が共通の土台として存在してい

た以上、前述の解釈（口語訳）は、その共通する感情の枠を越え出たものとは言い難い。

同時に主君（親王）のお側に集った人々にとつて、この酒宴の場の感動の中心はどこにあつたのかを考えれば、それは自分たちをこの里に閉じこめた雪にあつたのではなく、降りしきる雪によりかりそめではあるが今暫くは昔のように互いに主君（親王）のもとで語り合つてゐる時間そのものにあつたはずである。皆が心地良く酔い、歌を詠みながら談笑し合う時間こそが、かけがえないものとして感じられていたはずである。その共有された、しかしかりそめである時間を、「男」はどのように捉えて歌を詠んだのか。

「今日絶え間なく降り続く雪のせいでお側にいられるようになったのですから、雪が積もつて都に帰ることができなくなるのは、むしろ私の望みになつたことなのです」というような、「男」の立場からの一方的な心情の吐露だけだと主君（親王）の心情を揺さぶることができたのか、と考えると答えは「否」でしかない。最もこの時間をかけがえないものとして感じている、この雪がやんでこの者たちが帰ればまた孤独な隠遁者としての生活を送らねばならない主君（親王）の心情に、もつと寄り添つた歌の内容でなければ、主君（親王）の心を強く揺り動かすことはできなかつたはずである。

そのように考えて前述の口語訳（解釈）を振り返つてみ

ると「目離れせぬ」の部分の口語訳（解釈）は、筆者が傍線を付したように、「降りしきる」という形で「雪」の説明にとどまつてゐることがわかる。『伊勢物語』八十五段の題目ともなつてゐる「目離れせぬ」という言葉は、もつとこの歌の感動の中心を貫く重要な意味合いをもつてゐるはずである。前述の口語訳（解釈）が、「目を離すことができなほほどに降りしきる」という形で「雪」を説明してゐるといふことは、この「目」が雪を見つめてゐる「目」だということになる。そうではなくこの「目」は、感動の中心であるはずの「共有された時間を過ごす人々」に向けられていたものではないのか、という視点が浮かんでくる。筆者が前述の口語訳に大きな違和感を感じたのは、このような理由によるものである。

②『伊勢物語』惟喬親王にまつわる章段を通して

『伊勢物語』には、「男」（在原業平）と惟喬親王にまつわる章段が幾つかある。八十二段「渚の院」と八十三段「小野の雪」、そして八十五段「目離れせぬ雪」の三段である。

八十二段「渚の院」は、馬の頭（在原業平）と若い惟喬親王、紀有常との、桜と歌と酒を介したほのぼのとした交わりが、明るく屈託なく描かれてゐる。

八十三段「小野の雪」では、その後日談として、陽と陰の二つの面が対照的に描かれてゐる。前半は狩りから立ち帰つた渚の院（水無瀬離宮）で、惟喬親王をお送りしてき

た馬の頭（在原業平）が、早く退出しようとするが、親王が引き留める。馬の頭（在原業平）は歌を詠んで帰りたい気持ち吐露するが、親王は許すことなくこの一夜を馬の頭（在原業平）と語り合ってお過ごしになった。ところが後半は一転して、親王が突然出家し、降り積もった深い雪の中を馬の頭（在原業平）が小野の庵室を訪ねていく場面が描かれる。悲しみに打ち拉がれる孤独な親王にたいして、馬の頭（在原業平）は昔話を語り、そのままお側に控えたかと思ひながらも歌を詠み、泣く泣く帰って行く情景が語られる。

忘れては 夢かと思ふ 思ひきや

雪ふみわけて 君を見むとは

別離の場面で馬の頭（在原業平）は自らの断腸の思いを歌に託して親王に伝えて小野の里を後にしていく。親王の反応や心情については具体的に描かれてはいない。

八十五段「目離れせぬ雪」は、この二つの章段を受けた後日談として描かれている。八十二・八十三段との表現の違いは比較的多く、在原業平と思われる主人公が、馬の頭から「男」へと、主君も惟喬親王から「親王」へと変化しており、情景の描写も若干違っている。前二段と書き手が違うことも考えられると思われる。しかし、八十五段の第一段落は、「昔、男ありけり。童より仕うまつりける君、御髪下ろし給うてけり。睦月には必ずまうでけり。朝廷の

宮仕へしければ、常にはえまうでず。されど、もとの心失はでまうでけるになむありける。」とあるように、非常に簡潔な表現でありながら、前二段を意識した内容となっている。逆に言えば意識しているからこそ、簡潔な最低限の説明に終始しているとも考えられる。

八十五段の内容は、八十三段「小野の雪」の後半の内容と類似性が強い。天皇に即位する望みが絶たれた失意の惟喬親王のもとに、在原業平とおぼしき主人公が尋ねる場面である。季節も冬の正月、降り積もった「雪」に苦勞している点も似通っている。歌も主人公がその小野の里を離れる前に詠まれているという点で共通している。その歌の内容容までもが似通った内容であるならば、極論すると八十五段「目離れせぬ雪」は『伊勢物語』の中での存在意義を失ってしまうことになる。『伊勢物語』の書き手・編者はおそらく明確な意図を持って、この二つの章段の違いを意識し（もしくは設定し）、位置づけてきたはずである。

主人公である「男」を主体として、惟喬親王のそばを離れたくないという心情の吐露とは違った視点を、八十五段の歌は表出しているはずである。

③「目離れせぬ雪」の歌について

思へども 身をし分けねば 目離れせぬ

雪の積もるぞ わが心なる

八十五段の歌そのものを、細かく解釈していくと、次の

ような点が明らかになる。

初句……「思へども」の内容は明示されていないが、多くの解釈にある通り、惟喬親王のお側にありたいという

「男」の心情を暗に示していると考えられる。

二句……「身をし分けねば」も前述の通りで、「自分の体を二つに分けることはできないので」という原因節として下に続いていくと考えられる。

下句……「ぞなる」という係り結びをもち、「雪が降り積もることこそが、私の思いなのです」と結ばれている。

雪が降り積もり続けることは、このかけがえのない酒宴の場が続くことを意味する。身を二つに分けなくとも、惟喬親王のお側にいることができるという、「私の思い」をかなえてくれるものとして強調されている。「〔あなたのお側にいつも居たいと〕思うけれども、自分の体を二つに分けることはできないので、……雪が降り積もることこそが、私の思いなのです」という全体の流れになる。句切れはなく、一つの流れとして歌は弛むことなく流れている。

問題は中の第三句である。「目離れせぬ」という言葉の意味するところが、この歌の意味を左右する最も重要な部分であることが推察できる。

「目離る」という動詞の訳として、多くの辞書では「見慣れていた人や人物を次第に見なくなる。だんだん会わな

くなる。疎遠になる。」ととっているが、一部の辞書では原義として「目が離れること。目を離すこと。」ととっている。

「目離れ」という名詞の場合も「目が離れること」と原義の意味にとるべきだろう。「目離れず」は名詞「目離れ」＋サ変動詞「す」であるから、ほぼ「目離る」という動詞と意味的には同じであると考えて良いと思う。「ぬ」は打ち消し（否定）の助動詞であるから、「目離れせぬ」は「目が離れることがなく」という訳となる。

このように考えてくると、「目」が誰の視線か、何に向けられているものが、この歌の感動・思いを捉えるためには、最も重要な要素として浮かび上がってくる。前述のように、この部分を「私」や「親王」の視線が「雪」に向けられていると捉えるべきではない。歌の流れからは、「目離れせぬ」は「雪」の修飾語句のように見えるが、訳出してみると、「〔あなたのお側にいつも居たいと〕思うけれども、自分の体を二つに分けることはできないので、（私の）目が離れることなく雪が降り積もることこそが、私の思いなのです」となり、意味を通すことが困難になってしまう。前述したように、「目」は感動の中心であるはずの「共有された時間を過ごす人々」に向けられていたものと考えべきだろう。その場にいた「誰かの視線が、誰かから離れてしまわないように」雪が降り続くことを、詠み手であ

る「男」は願っていたのではないか。

(4)論文「見られることと見ること―『目離る』覚え書き」に指摘されている「目離る」の語義について

このような考察を行っているときに、インターネット上で「目離る」を検索していたところ、山本登朗教授（関西大学）の論文に行き会った。

引用①（十九ページ上段 三行～十四行）

万葉集の「目離る」は、一般の古語辞典等の記述とは異なり、自分が相手の「目」から、離れている状態を意味していると考えられねばならない。そこでは、自分が相手を見ることよりも、むしろそれ以上に、自分が相手によって見られることが問題になっているはずなのである。

例えば、さきの三〇〇番歌の場合、下の句は「妹を目離れず相見しめとそ」となっていた。そこで望まれているのは単に自分が「妹」を見ることだけでなく、自分が「妹」の目の前から離れることなく、絶え間なく「相見る」こと、つまりはお互いに絶えず視線を交わし合い続けることだったのである。（傍線筆者）

引用②（二十一ページ上段十六行～下段四行）

伊勢物語にはもう一例、八十五段にも、惟喬親王を思わせる出家隠棲した「みこ」の前で主人公が詠む次

のような和歌の中に、同様の表現が、この場合は連用形が名詞化した「目離れ」という形ではあるが、見出される。

思へども身をし分けねば目離れせぬ雪の積もるぞ我が心なる

詳細は省略するが、この場合も、「目離れせぬ」とは、親王の目の前から離れず、いつも親王の視線を受け続けているという意味であること、明らかである。伊勢物語に見られる「目離る」という表現は、万葉集以来の、相手から見られることを重視した意味のままに用いられていたと、まずは考えてよい。（傍線筆者）

引用③（二十二ページ下段五行～十九行）

相手を見ることとともに相手に見られることにも重きを置く万葉集の表現から、見られることを否定する一方的な「かいまみ」へ。この変化の背後には、相手にただ物理的に逢うことよりも、むしろ相手の目に見えない本当の心を知ることを重んじるという、平安朝和歌や物語に共通する姿勢があった。そう思っで見れば、さきに見た四十六段の場合も、そこで問題にされているのは、「目離る」という事実の当否ではなく、友人が自分を忘れたかどうかという、すぐれて内面的な、あくまでも心に属することがらであった。人々の問題意識は、相手を見たり相手から見られたりするこ

とから、その心を問うことへと、大きく移り変わって
いたのである。

平安時代になって「目離る」という表現に起こった、
前述のような誤解による意味変化も、このような大き
な流れの中で生じたものだったのである。

山本教授の論考において、万葉集における「目離る」と
いう表現は、「自分が相手を見ることができなく、むしろ
自分が相手の『目』によって見られることが希求されてい
る」「双方向的な視線によって成立するふたりの目の出会
い、つまりはふたりの目の見つめ合いこそが、ここでは求
められているのである」と結論されている。

山本教授の「目離る」に関わる考察を受けて、「目離れ
せぬ雪」の解釈を省察してみると、筆者が抱いていた疑問
点がごとごとく解消する。前述の筆者の口語訳（解釈）に
山本教授の語義を当てはめてみるとおおよそ次のようにな
る。

（あなたのお側にいつも居たいと）思うけれども、自
分の体を二つに分けることはできないので、あなたの目
の前から離れることなく、あなたに見つめられ続けるよ
うにと、雪が降り積もることこそが、私の思いなのです。

この口語訳（解釈）によって、疑問点が解消されるだけ
でなく、以下の二点において、この歌の感動の所在が『伊
勢物語』の流れの中で、より明瞭になってくる。

①見つめ合うことを喜びとする場への感動

心地良く酔い、歌を詠みながら、「男」は親王を見つめ、
親王は最も親愛なる者として、「もとの心を失わない」で
いる「男」とお互いに見つめ合っている。そのように談笑
し合う時間を、共にかけがえのないものとして感じている。
この雪がやみ「男」たちが帰れば、また孤独な隠遁者とし
ての生活を送らねばならない親王の心情に寄り添ったこの
歌は、「男」の一方的な心情の吐露の域を越えて、深く親
王の心を打ったはずである。親王の視線が自分に向けられ
ることを何よりの喜びと感じている「男」の思いを語るこ
とにより、親王の「男」を思いやる心情をも深く表出し、
親王の心を強く揺さぶる言葉として、「目離れせぬ」とい
う言葉の力が、二人を深く結びつけている。「見つめ合う
場」としての今を、そのかけがえのなさを、共有すること
の喜びを、十分に表現し得ていると考えられる。その思い
の共有は、親王に「いといたうあはれがり給うて、御衣脱
ぎて賜へりけり」という行為へと駆り立てるのに十分な力
を持っていたはずである。

②惟喬親王の逸話を貫く二人の交わりの感動

八十二段「渚の院」では、まだ若く歌に拙い惟喬親王を
暖かく見まもりながら、周りの者と歌を交わす馬の頭の思
いが描かれている。それは親王に対するある意味親愛の情
であると読み取れる。八十三段「小野の雪」の前半では、

帰りたい思いを吐露しながらも惟喬親王の思いに寄り添い夜通し語り合う馬の頭の姿が描かれる。同時に馬の頭を引き留め語り明かした親王の思いが、後半の出家の場面に結びついている。八十五段を含めて、惟喬親王と馬の頭との結びつきは、同じ場を共有し、ともに互いを見つめ合いながら歌を詠み、その心の機微を交わし合うという形で描かれている。具体的な事情や逸話が物語の主体ではなく、二人が信頼し合った主従の関係を大切にし、ともに歌を詠み合う場をかけがえないものとして共有していることこそが、『伊勢物語』の惟喬親王に関わる章段の主題であったと考えられる。

そう考えた場合、八十五段「目離れせぬ雪」の歌は、三章段の歌の中で最もその主題を明確に歌い上げた存在であると言える。同時に、惟喬親王の青年期・壮年期・晩年期を描いた三章段の最後において、親王を取り巻く状況が明らかから暗へと移ろう流れの中でさえ、変わることなく二人の間に結ばれている思いを描き出すことによって、物語を完結させる大きな力を持っていると言える。

4. 「目離れせぬ雪」の実際の授業展開

(1) 「目離れせぬ雪」までの学習歴

古典A選択者は、四月当初から『伊勢物語』を継続して学習してきた。通常の古典授業とは異なり、古文・漢文の

教材を、様々な方法で味わうことを指向してきた。

①音読を重視し、一斉・指名音読だけでなく、本文読解後に歌を含めて一人ずつ全文を音読し、相互評価をする。

②歌と前文に着目しながら、歌の詠まれた背景について、人間関係・場所・時間等の考察を深く行い、感動の中心についてまとめる努力をした。

③言葉にこだわって口語訳を行い、各自の工夫で情景・感情が理解しやすい表現にまとめることを重視した。

④主人公と思われる在原業平について文献やインターネットを用いて調べると共に、『伊勢物語』・在原業平についてのレポートをまとめた。

本実践までに取り上げた章段は「初冠」「月やあらぬ」「筒井筒」の三つで、歌物語である『伊勢物語』の特徴を意識しながら、それぞれの場面で意見交換・合評・相互評価などを行いながら、レポートを提出する学習を続けた。

(2) 第一時の授業展開

「目離れせぬ雪」の一斉音読、個別指名音読、範読を実施し、繰り返し本文・歌を読んで、言葉の感じをつかむ努力をした。その後惟喬親王と在原業平の関係についてその概略を指導者から説明し、本文・歌の口語訳を行うように指示した。これまでと同様、古典文学全集等の図書館の資料を活用してよいこととした。

今回の授業が今までの『伊勢物語』の学習のまとめであること、歌の口語訳がポイントになることを確認した。

(3)第二時と第三時の授業展開

第一時に取り組んだ各自の口語訳から六つを選び、授業プリント②として第二時に配布した。最初の指導者の指摘を受けて、学習者は口語訳に工夫を凝らしてはいたが、内容的には指導書等の口語訳(解釈)の範疇を越えていなかった。古典A選択の学習者は、一つのエピソードの帰結点として感動の中心に和歌が表出されているということがある程度理解していたが、第二時の学習活動においても、指導者による「詠み手自身の感動の表出だけで、他者である親王の感情をここまで強く動かすことができるのか」という指摘だけでは、視点の置き換えまでに至らなかった。

学習者の口語訳は、「お慕い申し上げるあなたのお側にこうして寄り添っていた」という「男」の心情をより強く強調する方向に向かっていた。また「目離れせぬ」の語義を「目を離すことが出来ないほどに」ととり雪にかかる修飾語句として取っているという点で共通していた。「男」が親王のお側に寄り添いたいという思いを持っていることは間違いないので、学習者がその思いを強調する口語訳に腐心するのはある意味当然のことだった。

第三時の前半にも継続して口語訳を検討した。指導者の

方から、「目離れせぬ雪」という言葉の持つ意味を視点を転換して考えさせる、適切な指摘やヒントを与えることができず、結果的に辞書の解釈の枠を越えることができなかった。学習者としては精一杯の解釈だと評価し、第三時の後半は、「目離る・目離れ」の用例分析を踏まえた研究として山本教授の論文を紹介して(上記引用①・②)、指導者の口語訳(前述)を提示した。

(4)授業を行っての反省点

①学習者が歌物語の文脈を踏まえて、地力で和歌を解釈するという目標は、一定程度達成されたものの、用例分析をすることなく視点を転換する解釈へはたどり着けなかった。

②指導者自身は、山本論文によって「いといったうあはれがり給うて、御衣脱ぎて賜へりけり」の親王の心情を納得する解釈にたどり着いたが、学習者にこの解釈を結論として示してよかったかどうかには、確信が持てないでいる。

5. 「目離れせぬ雪」の授業を終えて

授業としては当初の目標を果たせなかったが、結果的にこの授業で一番学習し楽しんだのは指導者自身だった。何よりも「目離れせぬ」という言葉について多角的に考察し

たこと、そしてその考察の範囲を越える語義を山本教授の論文によって獲得できたこと。それにより筆者は自己の考察を再認識し、『伊勢物語』全体に対する理解を大きく深めることができたと感じている。和歌を読み解くことのおもしろさを一番感じていたのは、指導者自身かも知れない。『伊勢物語』の簡潔で無駄を省いた叙述が、和歌の感動に直結していることを実感した。

和歌の口語訳は長く詳しくければよい、というものでもないと感じた。本歌のリズム感を失わぬように、簡潔に正確にその感動を今の言葉に置き換えることの、難しさと楽しさを同時に感じた。

「目離れせぬ」という僅か五音の言葉が、大きな意味合いを持ち、それに相当する言葉が千年も前に歌から消滅してしまっているということ。同時にその言葉の歌からの消滅が、その言葉が表出する感動の消滅を意味しているというところに対する驚き。しかしそれは現在の言葉を用いて「目離れせぬ」という感動・思いを表現することの難しさに直結している。いや、理解すること自体さえ難しいのではないかと感じられた。けれどもその難しさを通して、言葉を通して、自分たちの視点と違う感動や思いを読み解くことのおもしろさは、古典のおもしろさそのものだとも感じた。

参考文献

- ①『古典文学選 古典A』教育出版 2016年
- 『古典文学選 古典A 教授資料』教育出版
- ②『新編 日本古典文学全集 第12巻』小学館 2014年
- ③『日本古典文学全集 第8巻』小学館 1983年
- ④『新潮 日本古典集成 伊勢物語』新潮社 2004年
- ⑤『日本国語大辞典(縮刷版) 第10巻』小学館 1981年
- ⑥『古語林』大修館書店 2010年
- ⑦『全訳読解古語辞典』三省堂 2014年
- ⑧山本登朗「見られることと見ること―『目離る』覚え書―」(短歌誌『磔』10月号 通巻120号 1996.10.01 18―22頁)

(岡山県立津山東高等学校)